

子どものインターネット利用といじめ(9)

- ネットを介した／介さない仲間内攻撃の被害経験の重なり -

熊崎あゆち¹・鈴木佳苗²・桂瑠以¹・坂元章¹・樫淵めぐみ²(お茶の水女子大学¹・筑波大学²)

キーワード：ネットによる仲間内攻撃，ネットによらない仲間内攻撃，被害経験

問題と目的

近年注目されている「ネットいじめ」において、ネットの持つ匿名性という性質から固定的でないいじめの加害／被害関係が成立しやすいという言説がメディアで多く見られ(田川, 2012)、従来のいじめと独立して議論されることも多い。本研究は、ネットを介しないで、同じ学校の仲間から攻撃行動を受けた経験(被害経験)とネットを介して同じ学校の仲間から攻撃行動を受けた経験(ネット被害経験)との関係を検討する。固定的でないいじめの加害／被害関係が成立しやすいのであれば、被害経験とネット被害経験は必ずしも一致しないことが予測され、この可能性を検討した。

方法

調査時期・調査対象者 2009年12月から2010年3月に調査を実施し、19校の小学5年生1103名(男子551名・女子552名)、24校の中学1年生(男子1046名・女子943名)、9校の高校1年生1529名(男子872名・女子657名)であった。

質問項目 ①被害経験/ネット被害経験 桂ら(2011)と同様に、ネットを介した被害経験について21項目で、ネットを介さない被害経験について20項目で、この1ヶ月の間に「0:全くなかった」から「4:ほぼ毎日あった」の5件法を用いて尋ねた。②デモグラフィック項目 学年、クラス、性別などについて回答を求めた。

手続き 調査は、学級で一斉に実施し、回答済み質問紙は回答者自身が添付の封筒に厳封した後回収した。

結果

被害経験及びネット被害経験について、どれか1項目でも月に1回以上の頻度で経験したと回答した者を被害経験者とした。次に、被害経験及びネット被害経験の有無について、小中高の学校種別にクロス集計を行った(表1-3)。 χ^2 検定を実施した結果、全ての学校種において有意なばらつきが見られた($\chi^2(1) = 8.53, p < .01$; $\chi^2(1) = 37.08, p < .001$; $\chi^2(1) = 66.69, p < .001$)。下位検定として残差分析を行った結果、全ての学校種に

において、ネットによる及びネットによらない攻撃の被害経験がいずれも無い者と、ネットによる及びネットによらない攻撃の被害経験が両方ある者が有意に多く見られた。

考察

本研究によって、ネットで被害を受ける者は、ネット以外でも被害をうけているということが示された。本研究によって、ネットにおける攻撃行動の加害／被害関係がネット以外と独立に成立するような結果は得られず、ネットによる仲間内攻撃は学校における人間関係の延長上にあることが示唆された。

表1 被害経験／ネット被害経験の有無(小学校)

		被害経験		合計
		無	有	
ネット	無	361(2.9)	531(-2.9)	892
被害経験	有	5(-2.9)	28(2.9)	33
合計		366	559	925

表2 被害経験／ネット被害経験の有無(中学校)

		被害経験		合計
		無	有	
ネット	無	702(6.1)	920(-6.1)	1622
被害経験	有	14(-6.19)	92(6.1)	106
合計		716	1012	1728

表3 被害経験／ネット被害経験の有無(高校)

		被害経験		合計
		無	有	
ネット	無	900(8.2)	418(-8.2)	1318
被害経験	有	56(-8.2)	102(8.2)	158
合計		956	520	1476

註)表1-3のいずれも、()の中は調整済残差の値

引用文献

桂(赤坂)瑠以他(2011). 日本におけるネットいじめの現状と対策(2)-小学生・中学生・高校生を対象とした被害経験の実態調査, 日本教育工学会第27回大会 首都大学東京.
田川隆博(2012). ネットいじめ言説の特徴-新聞記事の内容分析から-, 名古屋文理大学紀要, 12, 89-95.

註) 本研究は、三菱総合研究所、安心ネットづくり促進協議会と連携して行われた。また、本研究は最先端・次世代研究開発支援プログラム「ネットいじめ研究の展開-「行動する傍観者」を生み出すプログラム-」(代表: 鈴木佳苗)の助成を受けている。